第三講　家族論・ジェンダー論・言語論（前編）

家族が言葉を誘発している。家族についておびただしい言葉がついやされ、そのあり方が分節化され、それをめぐる経験が名づけなおされている。内側と外側からのこの言葉の群れは、家族をめぐるどういう事態を指し示しているのだろうか。

家族が言葉を必要としているのである。かつてある社会学者は次のような指摘をしたことがある。A家族という集団は「あれは、やっぱり、こうしておこうね」というようなナンセンスな言葉で用が足りるほど濃い液体でみたされているものであって、もし言葉が必要な事態が発生したらまったく無力である、と。いかにも生活実感をなぞったようにみえるこの指摘は、いまや牧歌性をすら感じさせるかもしれない。それほどに家族のあり方が関心の集中点となり、切実に言葉が必要な事態が生じているのである。そしてその「事態」は、家族の無力さよりもむしろ、このような指摘そのものの無力とその虚偽性を明らかにせずにおかない。家族を支配するナンセンスな言葉とはなにを意味するのか、「濃い液体」として表現されている関係はどのようなものなのか、そもそも家族が無力であるとはどういう事態を指すのか。ここには分節されるべき状態があり、それを塗りつぶすような指摘自体が言葉を誘発するという問題がある。

私たちは、いってみればこの「濃い液体」に類するような言葉で家族を考えてきたのではないか。家族の危機とはこの液体の濃度が薄まることであり、さらには液体そのものが流れ出したり飛び散ったりすることであった。あるいは反対に、Bその濃度の上昇が液体内の個人を窒息させてしまうことこそが危機的事態なのだと考えられた。こうして、肯定的にせよ否定的にせよ、家族はそこで分析を中断させてしまう分割不能の単位、一体不可分の場所として考えられてきた。その場をみたす液体はまさしく分割できないものであり、その濃度は生活にそくして確かめるまえに先入見や予断で判定されてしまうだろう。そこには、家族は言葉を必要としないということ、いや言葉を拒むものであるという前提がおかれていた。そうであるとすれば、考えをすすめるための前提が間違っていたことになる。

このような前提をくつがえして、液体の成分分析をはじめたのが女性たちであることはいうまでもない。間違った前提のもとで苦しみ、間違った前提がもたらす負担を背負ってきた者たちによって、それはくつがえされる。つまり、家族は言葉を必要と

するのである。言葉を必要としたとき、家族はただ無力なものとして現れただろうか。そうではなかった。単純な成分分析によっては還元しきれない関係として家族が見出（みいだ）された。「経験」の場として再発見されたといってもよい。社会生活のほぼ隅々まで「商品化の精神」が浸食して、否定的なかたちですら危ういほどに経験の余地が切り縮められたとき、C消極的ないし否定的な場として社会的経験の欄外におかれてきた家族が逆説的に発見されたのである。間違った前提のもとでいわば「不問」にされてきた領域が、そのような前提のうえに成り立つ社会を考えぬくための場所として、おびただしい問いを引きよせることになった。

（市村弘正『小さなものの諸形態』による）

問１　傍線部Ａ「家族という集団は『あれは、やっぱり、こうしておこうね』というようなナンセンスな言葉で用が足りるほど濃い液体でみたされている」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　没個性的で意味のない言葉だけを使っているように見えても、家族というものは血縁によってしっかりと結ばれているものである。
②　それぞれ自己を主張する言葉はなくても、家長によって支えられてきた伝統的な家であるかぎり、その家族は強いきずなで結ばれているものである。
③　男性主体の言葉を使っているように見えても、伝統的に家を中心としてきた社会においては、それぞれの家族はかたくまとまっているものである。
④　めいめいの個性的な言葉を用いなくても、家族というものはその家の古くからのしきたりによって十分まとまっているものである。
⑤　内容をさほど具体的に表す言葉でなくてもコミュニケーションが可能なほどに、家族は、共通の体験と知識を有し、親密に結ばれているものである。

問２　傍線部Ｂ「その濃度の上昇が液体内の個人を窒息させてしまう」とあるが、その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　自分の家族が親密の度を増すことによって、家族以外の他者から排除されてしまうということ。
②　家族内の関係が複雑になることによって、自分自身の立場が失われてしまうということ。
③　家族の構成員の関係が明確になればなるほど、その関係が家族内における個人を分節化してしまうということ。
④　家族内の関係が緊密になればなるほど、それに属する個人がその関係によって自由を奪われてしまうということ。
⑤　家族というものが不可視のものになればなるほど、その中の個人は無視される存在になってしまうということ。

問３　傍線部Ｃ「消極的ないし否定的な場として社会的経験の欄外におかれてきた家族が逆説的に発見された」とあるが、「家族が逆説的に発見された」とはどういう意味か。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　従来社会的な意義をもたないとされてきた家族が、現代の「商品化の精神」の普及によって、逆に社会を考える場として改めて見直されることになった。
②　家族は本来人間生活の経験を習得し、実践する場であったが、現代の「商品化の精神」の普及によって、逆に経験の機能が弱まり、家族の意義の見直しが必要となった。
③　家族は本来言葉を必要としないほど内輪の経験によって成り立っていたが、現代の「商品化の精神」の普及によって、逆に言葉が必要とされる事態となり、無力で消極的な存在になった。
④　従来閉鎖的で濃密な人間関係の中で成り立ってきた家族が、現代の「商品化の精神」の普及によって、逆に社会的に開放された存在へと変質していることが明らかになった。
⑤　従来家族という単位は、さして社会的な機能を持たないと考えられてきたが、現代の「商品化の精神」の普及によって、逆にその機能が拡大されることになった。

第三講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　市村弘正＝いちむら　ひろまさ　思想史・社会哲学の研究者。法政大学法学部教授

語句

おびただしい＝夥しい↓たくさん・数多く
分節化＝ぶんせつか↓細かく割って、分析&説明する　文の発音上の区切りを意味する「文節」とは違うから注意
牧歌性＝ぼっかせい↓牧場で歌を歌うように、のんきでいいねというプラスの意味とのんきすぎでよくないとのマイナスの意味がある。本文は後者です
虚偽性＝きょぎせい↓ウソやデタラメの度合い
先入見＝せんにゅうけん↓きめつけ・既存の固定観念・先行したイメージ・先入観
予断＝よだん↓前もっての判断・先入観の類義語
還元＝かんげん↓単純化する（本文での意味はこれ）・元に戻す（化学の「酸化還元」など
／「円高還元セール」↓輸入品を安く買えた分、値引きしてお客様にも利益を振り分けますというもの）
逆説＝ぎゃくせつ↓一般的な説明や理解とは反対のところに真実がある・パラドックス

復習問題　第三講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）家族が言葉をユウ発している
　①雄　②遊　③優　④誘　⑤悠

（イ）家族の在り方を分セツ化して語る
　①接　②節　③刹　④設　⑤切

（ウ）社会に大変なジ態が起きている
　①自　②時　③事　④辞　⑤次

（エ）のんきで牧カ性を感じる
　①家　②化　③荷　④香　⑤歌

（オ）極めてセツ実な問題である
　①摂　②節　③切　④拙　⑤折

（カ）報告書に虚ギが見つかる
　①戯　②偽　③儀　④義　⑤議

（キ）これらは一体で不カ分である
　①科　②加　③可　④過　⑤果

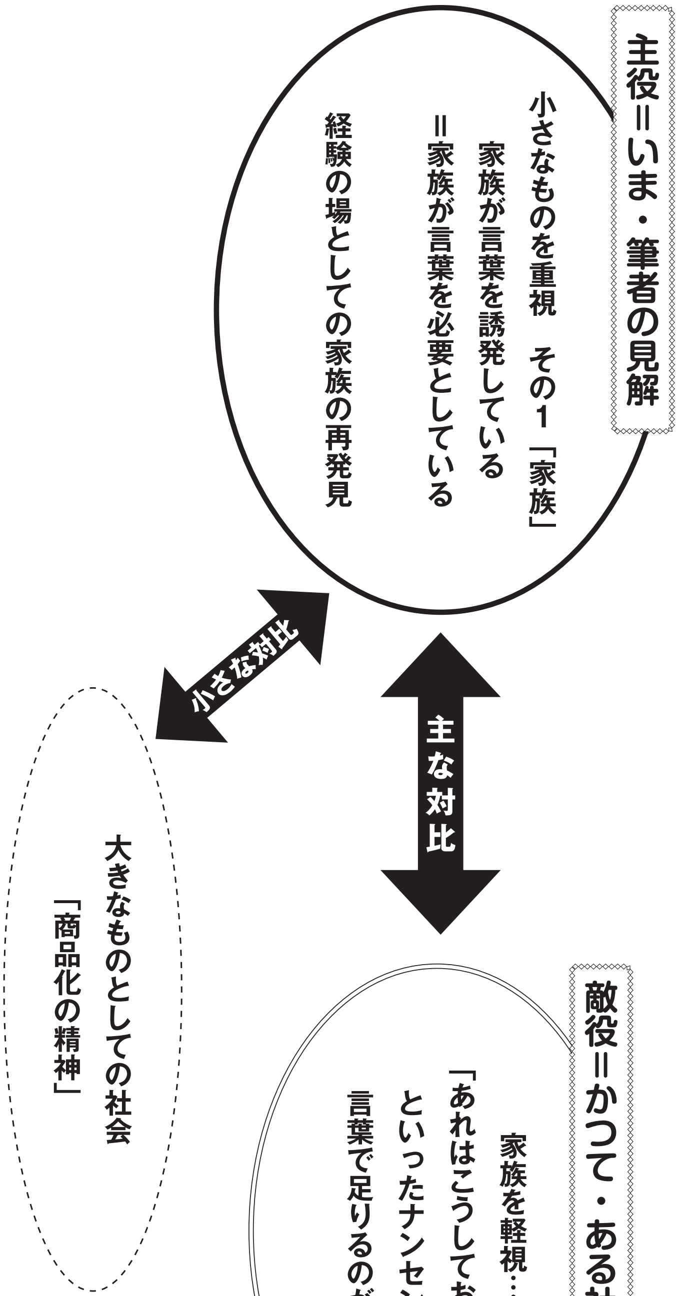
（ク）先入見やヨ断は禁物である
　①予　②余　③代　④与　⑤預

（ケ）単純にはカン元できない複雑さ
　①環　②甘　③還　④換　⑤喚

（コ）風雨による岩のシン食が進む
　①深　②浸　③津　⑤新　⑤進

第三講　家族論・ジェンダー論・言語論（前編）

《本文の対比構造》



《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

今回の敵役である、かつての「ある社会学者」の見解が傍線部ですよ。一方、筆者は何と言っているのか。「家族が言葉を必要とする」と述べ、家族の「内側と外側」、つまり家族内、家族同士でも言葉をついやすこと、さらに現代の社会学者などが家族について学問的に、外から言葉を尽くして説明し始めていることを重視しています（そういえば、〝家族ともっと話そう〟というキャッチフレーズで〝家族割引〟をしている携帯電話会社もありますね。それから、「家族論」は昨今の入試現代文や入試小論文でも頻出のテーマです）。それなのに、傍線部にあるように、〝あれ、これ、それ〟みたいな「ナンセンスな言葉で用が足りる」としているわけです。すなわち、「おびただしい言葉（たくさんの言葉）」⟷「ナンセンスな言葉（言葉の意味内容が尽くされてない・からっぽな言葉づかい）」という対比です。傍線は後者です。〝かあさん、あれはどこかな。あれですか、それならおとうさんの頭の上ですよ〟みたいに、無事に老眼鏡、発見とかね。したがって⑤が正解。「内容をさほど具体的に表す言葉でなくてもコミュニケーションが可能」という表現は、本文の正しい対比を踏まえています。一方、他の選択肢はことごとく、この正しい対比をスコーンと忘れ、ありもしないことがらを比べています。①は「没個性的」が×です。〝個性⟷没個性（個性なし）〟なんて、本文は比べていません。④も同様に「個性的な言葉」を持ち出していて×です。②は「自己を主張する言葉」が×です。〝オレがオレが、という自己主張⟷ひかえめで奥ゆかしい言葉〟など比べていません。こうした問題をつくっているひとたちって、ホントよくもまあ、見事に間違い表現を、つまり本文にはない表現を、〝創作〟するものですなあ。感心します。イヤミじゃありません。本当に感心します。みなさんも現代文読解と設問の解法を学び、こうして〝つくられた間違い〟を即座に指摘できるようになりましょうね。笑いながら設問をとけるようになります（本番の試験中にクスクス、ゲラゲラでは注意されますから、ニヤニヤ、ニコニコくらいでね）。さて、③は「男性主体の言葉」が×です。〝女性主体の言葉⟷男性主体の言葉〟は、ここでは比較されていません（第四講で扱う、この文章の後半から登場するものです）。というわけで、すべて正しい対比喪失の誤りです。加えて、細かい点ですが、①は「血縁」も×です。これは「濃い液体」を文脈抜きに血のつながりと解釈した間違いです。本文では、「生活」をともにすることからうまれるもの、「一体」感の意味で使っています（一般に、夫婦は血縁ではないしね）。こういうのを、文脈喪失の誤りといいます。

問２《傍線部説明・選択肢》

こちらも問1同様に、従来の考え方、かつての「ある社会学者」に見られるような考え方の説明です。家族同士、家族内では大して言葉もいらず、濃密な人間関係があるという方です。関係が濃すぎてときに縛りあって、息苦しいくらいだということです。受験勉強しているみなさんも感じることがあるでしょ。勉強に打ち込んでいる自分のことを家族が気遣ってくれるのは、わかるけど、それは期待のあらわれでもあるから、ちょっとうっとうしい、でも感謝もしないと、とかね（受験は人生の縮図みたいなところがあるから、いろんな経験になるんだよ）。したがって、④が正解です。①は、「家族以外の他者から」が×。ここでは「液体内」「家族内」の話のはず。記述に反する誤りです。〝家族内⟷家族外〟というヘンなものを比べているという点では、正しい対比喪失の誤りです。②は「複雑」が×。家族関係をめぐって〝複雑⟷簡素・シンプル〟なんて比べていませんね（大家族と核家族かよ！）。正しい対比喪失の誤りです。③は「明確」が×。これまた〝明確⟷不明確〟なんて比べていません（親子関係を明確にとか、兄弟関係を明確にとかですかね。なんかヘンです）。さらに「分節化」も×。これは筆者側のことばだよ。この点では対比混乱の誤りです。⑤は「個人は無視される」が×。むしろ、家族内では関係が濃密な分、気に掛けるはずですから。記述に反する誤りといえるでしょう。

問３《傍線部説明・選択肢》

今度は、筆者側からの反撃です。従来の考え方を乗り越えていく方向ですよ。「かつて」、つまり「従来」は、家族は社会に比べて軽視され、「『不問』にされて」きた。タイトルの『小さなものの諸形態』を踏まえると、大きな社会のほうにばかり、これまではスポットライトが当てられてきたけれども、いまや、小さな家族にスポットライトが向けられるようになり、家族が「発見された」。もちろん、大昔から家族はあった、そこにいた（いわば舞台、ステージの上にいた）わけですが、主人公は〝大きな社会〟とみなされ、誰も家族に注目してこなかったということです。ところが、その〝大きな社会〟の方が、かすんでしまったため、背後にいた〝小さな家族〟に、がぜん注目がいくようになった。どうしてかというと、「社会生活のほぼ隅々まで『商品化の精神』が浸食」し、「経験の余地が切り縮められた」からです。「商品化の精神」については、本文に説明がありませんが、以下のようなイメージでよいでしょう。例えば、未知の土地へ行って、すごい経験をしてくるぞ、と思っても現代社会ならパッ

ケージ・ツアーで行けますよという感じ。南極探検もエベレスト登頂も、百年前なら国家的威信・プライドまでかけた大冒険だったけれども、現代社会なら街角の旅行代理店からお申込みできますよ、商品ですよ、というぐあい。こうして「経験」の場として、こっちこそ中心だと思われていた「社会」の魅力が減退したせいで、すみっこにいた「家族」にクローズアップというわけです。「社会」の方ばかり見るのではなく、「家族」こそ社会や経験というものを考える上で大事だったんだな、という評価の転換ですよ。これが「逆説的に発見（意外なかたちで見出された）」ということ。ここで肝心なことは、「家族」自体は大きくなったり、変化したりしたわけではないという点だよ。変わらずそこにいて、やっと光があたったということです。したがって、①が正解。④や⑤はそれぞれ「変質」、「機能が拡大」が×。家族は変わってないのだよ。つまり記述に反する誤りですね。さらに④は「閉鎖的」と「開放」というヘンなものを比較しています。こういうのを正しい対比喪失というわけです。②も③も変化の指摘になってます。「機能が弱まり」「無力で消極的」など。記述に反する誤りですな。とくに③の「言葉が必要とされる事態となり、無力で消極的な存在になった」は、筆者の見解ではなく、敵役の「ある社会学者」の見解です。したがって、この点では対比混乱の誤りです。さらにさらに「家族は本来言葉を必要としないほど内輪の経験によって成り立っていた」が×です。「本来」というなら筆者が述べる家族の本来の重要性とセットになるはず。逆に家族を軽視する表現は「従来」とするべきでした。つまり〝本来＝筆者側＝家族重視⟷従来＝敵役＝家族軽視〟という構造なのに混ぜています。そうです、対比混乱の誤りです。

模範解答
問１＝⑤　問２＝④　問３＝①

復習問題　解答　第三講

（ア）④　（イ）②　（ウ）③　（エ）⑤　（オ）③
（カ）②　（キ）③　（ク）①　（ケ）③　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）誘発　（イ）分節化　（ウ）事態　（エ）牧歌性　（オ）切実
（カ）虚偽　（キ）不可分　（ク）予断　（ケ）還元　（コ）浸食